

緒 方 貞 子

(上智大教授)

国際人とは、外国へ出かけていって外国人とたやすく交際できる人をいうのではない。語学にたけ、外国旅行に馴れ、外国人と交渉のできる、いわば外国人とつきあう技術をもった人を意味するものでもない。

国際人の第一条件は、外国人や外国の考え方など異質なものに対して寛容な心をもつことである。今日の国際社会は、多種多様な民族、文化、生活慣習や信条によって成りたっている。日本では、同じ民族が同じ言葉を話し、同じ文化のもとで長い間暮してきた。そのうえ、富の均衡化、教育の普及、マス・メディアの発達などによって、私たちは、従来にもまして同質な社会に生きている。国際社会の多種多様性を受けいれる条件は、一段と悪くなっているとさえいえる。

しかも日本人が国際社会を考える時、依然として欧米の先進国を考え、彼らとの交流をはかろうとする。明治以来、欧米に追いつくことを目標にしてきた思考パターンがいまだに残っているのであろう。研修といえは欧米のもっとも進んだ施設や制度を学ぶことであり、留学といえは明治時代と同様、欧米のいくつかの国へ勉強に行くことである。ところが今日の国際社会を構成する大多数の人びとは、開発途上にある国の人びとである。彼らの言語、文化、宗教は、日本人の多くがふれたことがないものが多い。学校教育においても、社会教育においても、途上国関係のものを教えることはきわめて限られている。

私は、開発途上国を含めたすべての人びとについての知識を習得することが国際人の条件であるというのではない。ただ肝要なことは、このような国際社会の現実をはっきりと認識して、一段と開かれた態度でのぞむことである。

いかなる国も単独では生存することができない今日、異質なものに開かれた日本人、すなわち本当の国際人を育てること、そしてそれによって日本の社会を開放された社会とすることは、私たちにとっての急務である。